

社會と個人

平安女學院 大塚 喜一

アリストテレスが其政治學の始に「人は社會的動物である」云つたのは動かすべからざる眞理であると思ふ。我々人間は母の胎内より生まれ出で、家庭の中に「人」になつたのである。家庭は最初の社會であり、最も自然に生長しつゝある基本的社會である。

母親がその嬰兒を抱き純眞なるこゝ神の如きその笑顏を見て我知らずほゝゑますにはゐられなくなる。母の笑む顔を見て嬰兒はその自然の本能即ち反射的模倣によつてその表情を模倣して笑ふ。するに母は自分の心もちが我が子に通じたのを喜び、一層うれしうな顔をして赤ちやんをいろ／＼あやしてゐる。この美しい情景の中に子供の心は母によつて母に生長してゆくのである。我々は自分一人の力で大きくなつたやうに思つてはならない、實は皆かくして「家庭」さいふ社會の中に生長して來たのである。

上述の例は、凡そ社會なるものが形成さるる最も單純なる基本的な情景を表現したのである。米田教授が「社會現象の原素的事實は心と心との相互作用である」云はれた様に、一般に心と心との相互作用が行はれる時、そこに最初の社會がうまれる。しかもこの各々の心は、互に交流し相通ずるこゝによつて生長し發達するのである。子は母によつて育てられると同時に、母は斯く子を育てる實行により甫めて母たり得る。換言すれば母にふさはしき性情資質即ち「母らしさ」はわが子を育てる體驗によつて徐々に體得されるのである。

社會と個人とは生きた人間生活の両面とも云ふべく、兩者は上述の如く切つても切れない密接な關係に於て一體となつて結びついてゐるのであり、親子・兄弟・姉妹・夫婦・朋友・師弟等みな斯かる親しき心の交流により互に相呼應し

つゝ生きて行くのである。

*

高等女學校の教育の講義を終つて職員室に歸つて来るに
机上に「幼児の教育」五月號が來てゐる。早速封を切つて卷
頭の言を開いた。「教育される教育者」なる題下に

教育はお互である。

ミ書かれてゐる最初を讀んだ時、自分の今の心境が鮮やかに
寫し出されてゐるのを感じた。學生時代に幼児ミ遊ぶ樂
しさを味つたこゝが本になつて次第に深く斯道に足をふみ
入れて來て遂に今日あるを得てゐる自分にミつては、幼児
から受けてゐる事は實に測り知るべからざるものであり、
幼児のおかけで樂しく生を送りつゝある事は改めて云ふに
はあまりに直接の嚴然たる平常の事實である。恰も終日太
陽の恵みに浴する者が農行に日の出を拜するにも比すべき
か。この心境は今迄本誌に書かせて頂いた中にも幾分は現
はれてゐるミ思ふ。しかし、今この巻頭の言を見て特に感
じたのは、前から「幼児の世界」に於て斯く感じてゐるのに
も似た心境が、女子教育に於て更に切言すれば「處女の世

界」に於て新しく感ぜられて來たこゝである。若き處女達
ミ共に教育を學んで來た月日尙淺きにも拘らず、如何に自
分が「教育される教育者」であるか、幸にして斯くあり得た
ミいふ自己がはぐくまれてゐる社會に對する感恩の心であ
る。今「社會ミ個人」ミ題して述べたこゝは、教科書の著者
の精神を生徒達自身の事ミして眞に理解してほしいとの念
願を以て述べたのであるが、同時に自分自身の心持を語る
こゝにもなつてゐた。今述べた材料は大學の講義や自分の
讀書から大部分得てゐるが、これを組織し編成して斯く語
らしむるに至つた原動力は確に生徒達ミお互に學びつゝあ
る間にはぐくまれたのである。

本年の入學式に於て院長先生は、將來幼き者を育てる母
たるべき女性の愛の力に就て力説せられた。これは本院に
就任以來の自分の目標であるが、扱て母たるにふさはしき
心情の涵養が果して一齊教授の學校教育に於てミこまで可
能であるかは内心いさゝか疑問であつた。然るに今日まで
の間純眞な諸姉の熱心によつて悟らせられた事は、教師
が眞に生徒に理解せしめようミ念願する心の必然の歸趨ミ

して生徒に倍々學ばむとする態度になつた時、自然に處女の若き魂の中から、子供の心理に生活の理解や母に對する感謝等の美しき心情が芽生えて來るこいふ幾多の生きた事實である。此間の情景を如實に物語る諸姉の感想の一例を、本人の承諾を得て左に紹介する。自分がこの稿を特に本誌に寄する所以は、自然にして眞實なる保姆養成の出發も中核も實に女子教育のこの要諦に一致すべきものなる事を教へられたからである。

*

約一年前をふり返つて見るに、先づ第一に新しい香のする本を手にして全く未知の世界に對する軽い不安と一體教育とは如何なる事を學ぶのだらうか云ふ喜びに近い好奇心を混ぜ合せた様な氣持で第一の課業を受けた事が懐かしい思ひ出になつて胸に浮んで來るのです。そして第一の授業によつて、私の僅かながらも豫期してゐた事は全く反對であつて、被教育者と教育者の二つの魂が融け合つて一つのものになりさへすれば教育は行はれると云ふ事を教へられ、今日では心の底から會得出來る様になりました

た。私がいつも先生の授業に就て思つてゐる事は、先生が自己の思ひ感じてゐる事を全くそのまま私達生徒の一人一人の心にわけ與へようとする苦心なされた事、即ちさう表現すれば私達の心にピンと來るか云ふ苦心なされた事を思ひます。勿論先生として生徒によく理解させようとする苦心なされるのは生徒に對する先生の尊きお心と思ひます。けれどもこの様なさう云へば内面的な學科には殊にその苦心は大きなもの、教へて下さる時の先生の話し方や態度によつて推しはかる事が出來ます。又講義に子供の實生活それ自身からの實例を取つて下さつた事だと思ひます。これによつて私は今まで、この様な事をするのは子供の常であつていはゞ習慣の様なものであると思つて、それを當然の事柄として見、その爲比較的無關心に過して來た子供の動作に對して、これはさういふ心理作用が原因になつてゐるか又この心理作用は成長すればさういふ事と關係して來るか云ふ事を、出來るだけ細かに觀察しようとする心、即ち子供に對する私の心眼が開かれて行くと同時に、母に對する色々の感謝の氣持が今までよりもつゝ強くなつたこ

思ひます。最近母はよくこんな事を云ひます。「娘の落ちて行くのは母がいけないのだ（無論娘をよい云ふのではない）娘の心に母が宿つてをりさへすれば、身は如何に遠く離れてゐても迷の十字街に立つても、自身の心に宿る母即ち母の愛によつてたゞ一つの恥じる事のない正道をたゞひたすらに進む事が出来る。要するに娘の墮落するのはその子の心に母が住んでゐないのによる」。又「お母さんは初めて自分の子ミ云ひ得るお前が女學校を卒業する時が來たと思ふミ大變うれしい。この日をきだけ待つた事だらう」

「私は絶對にお前を信頼し理解してゐる。お前はどんな事があらうミ私を失望させたり疑を抱かす様な事はしないでらうね。私はそう信じる。又母ミして信じなければならぬ」。この様な事を母が云つた時はいつでも私は次の様な事を思ひます。

「私の母は一人のか弱い女性に過ぎないけれども、私にきつては神佛よりも偉大であり尊敬する者であり全く唯一であり且つ滅びる事なく永遠にわが胸に住む者なり」。こう思ふ事の出来るのは百萬の富にも代へ難い私の幸福であります。

す。

先生が講義をなさる時、少し眼を閉ぢる様にして母についての記憶を辿つていらつしやるのを見る度に、先生は今は教師ミして立つていらつしやるがその瞬間幾十年か昔の幼い子供になつていらつしやる、あゝ美しいと思はずには居れません。

私が殊に母に就て細かく書きたく思つたのは、両親の愛を母のみによつて受けたからでせう。父は私の三歳の時ミかに他界の人ミになりましたから、父に就てはたゞの一言も一事も知らず勿論顔や姿も何も知らないけれど、父の子である私の心に映する父は全く私の理想的な人物です。容貌・性格・精神共に神に近い様な立派な人を胸に描いてゐるのです。この實際ミしてあり得ないはゞ空想的な人物をきこまでも我が尊敬する父ミして満足し信じてゐるのは他人から見れば大變愚者の様な氣がするであらうけれども、私はそのうは思ひません。眞面目に、そう、だ、ミ考へてゐます。

それは恰も私達のよく聞く子供同志の會話の様であります。

「僕のお父さんは偉いよ、お巡りさんだもの、いや僕のお父さんの方が偉いよ、學校の先生だもの、だつてお巡りさんの方が偉いよ、悪い人を捕へてお國につくすのだから、そしたら和ちゃんのお兄さんだつて偉いわね、兵隊さんだもの……」。

これは子供にまつてほんまに神から授けられたそのまゝの清らかな心であらうと思はれます。裏長屋に住む貧しい子供から、多くの召使に坊つちやま〜〜と呼ばれる子供に至るまで共通に持つ父に對する心だ。私は信じます。私が父を空想に近い人物として描きそれを信じてやまないのもまだ幼い時そのまゝの子供心が残つてゐるのだと思つて大變うれしく思ひます。(これは單なる私の勝手な考へであるのでせうか?) 私としてはいつまでも信じてゐたいものです。(このあたり、さうしても言葉や字でもつて云ひ表はす事の出来ない複雑な感情を、先生はこの所を通じて知つて下さる事と思つてをります。私の考の誤つた所がありましたら一寸知らせして下さい)。

私はまだ教へて頂く先生は異つても、又數年の間教育の

授業を受ける事が出来るので大變うれいします。その間出来るだけ子供の實生活を重んじて研究的な態度でその授業を受けようと思つてゐます。

城西嬰兒學校

野口援太郎氏の、東京市長崎町城西學園中學に、この六月から城西嬰兒學校を併設、我國始めての幼稚園前の嬰兒教育が行はれることになつた。主任は兒童心理學の三隅一成氏で、先づ三學級を編成、下級は滿一歳半前後から滿二歳半まで、上級は滿二歳半から滿四歳前後を收容、完備せる組織の下に新教育を與へることになつた。嬰兒は一日二回小兒科醫の診斷を受ける外、牛長の規則的調査、榮養給食等至れり盡せりの待遇を受ける筈であるが、何分にも我國初めての企てなので同校の將來は各方面から非常な期待をかけられてゐる。